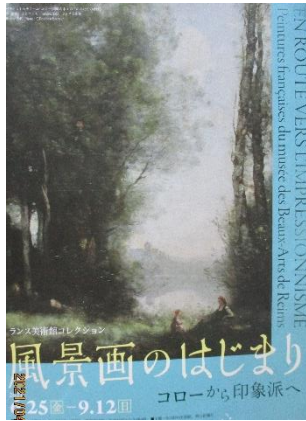


## 風景画のはじまり コローから印象派へ

SOMPO 美術館（西新宿） 2021.06.25～09.12



1913年開館の「フランス・ランス美術館」は、シャパン・メーカーの収集家が没後に、絵画、彫刻、ガラス器等の収集品をランス市に遺贈して始まった。

美術品は、ロマン主義、バルビゾン派、写実主義、印象派、象徴主義、自然主義、アール・ヌーヴォーなど「19世紀のフランス美術」を網羅していて、本展では、そのコレクションから選りすぐりの油彩画「約50点」に加えて、個人蔵の版画「26点」をあわせて紹介をする企画内容で開催されている。

「ジャン＝バティスト・カミーユ・コロー」(1796～1875)は、19世紀大半を生きたバルビゾン派の一人で、次世代の印象派との橋渡しをした画家である。  
《湖畔の木々の下のふたりの姉妹》 上図 1865～70年 油彩/カンバス

カミール・コロー 《突風》 1865～70年 油彩/カンバス



天気の良い日没時の突風風景の珍しい描写で、大きな樹木の幹と枝は大きく曲がり、歩く女性にも襲いかかって変貌する様子を見事に表現した、“写実主義的特筆”を端的に示している作品とされる。

モチーフは、野原を吹き抜ける突風の印象が、あちこちに散らばる木立、ちぎれた線、残された部分との兼ね合いが不均衡によって表現されている。

コロー 《柳の木陰に浮かべた小舟での漁》 1870～73年頃 油彩/カンバス



画伯は、頻繁に“漁のテーマ”を選んでいるが、漁の場面は小舟が描かれることによって、より一層強調されていて、筆触は力強く素描は的確であり、色彩はしっかり輝いている。

画面の木々の葉の霞がかかった表現は、植物のぼんやり霞んだ様子を思い起こさせる、非常に純粋な感覚から生まれているとされている。